

伊庭節子さん●NPO法人まいづるネットワークの会理事長

伊庭節子さん 一人のおかみさんが 舞鶴を変えた

完璧主義に苦しんだ30代。不完全でいいと割り切つてから、一人のおかみさんが舞鶴市を変え始めました。「肉じゃがが発祥の地」宣言から海軍グルメブーム起こしに、舞鶴全体の連携を呼びかけるネットワークづくり。八面六臂の活躍に至るまでの道のりを伺いました。



いば・せつこ

1948年、京都府舞鶴市生まれ。71年、同志社大学文学部英文学卒業と同時に家業の丸二金物(株)入社。91年、商店主婦の会「八島おかみさん会」を設立、会長に就任。94年、まいづる女性連絡協議会に参加。95年、まいづる肉じゃがまつり実行委員会の設立に関わり料理長に就任。99年、まいづる女性連絡協議会会長に就任。2001年、舞鶴市女性センターネットワークの会を設立、会長に就任。現在、丸二金物(株)常務取締役、NPO法人まいづるネットワークの会理事長、八島おかみさん会会長、まいづる肉じゃがまつり実行委員会会長兼料理長、舞鶴観光ガイドボランティア「けやきの会」会長、京都府中小企業女性中央会きょうとMOCO会長、京都府中小企業団体中央会理事、全国レディース中央会副会長。

海軍の肉じゃがレシピを 試行錯誤で復元

——「肉じゃがが発祥の地」の生みの親と伺いました。

伊庭 95年、まちづくり活動をしておられた方が呼びかけてくださったのが発端です。舞鶴市の海上自衛隊の図書館に海軍厨管理教科書、つまり海軍食のレシピが残っている。その中の「甘煮」がどうも肉じゃがらしいと。旧軍港のあった横須賀、呉、佐世保の3市に確認すると、そんな教科書は残っていないと言う。舞

鶴にしかない、日本で唯一の本。それをもとに舞鶴を肉じゃがが発祥の地にしないと誘われて、すぐに参加しました。

——なぜ肉じゃがのレシピが舞鶴にあったのですか。

伊庭 海軍舞鶴鎮守府の初代司令長官が東郷平八郎元帥(当時は中将)だったのですが、東郷さんはイギリスのポーツマスに留学経験があったそうです。現地で食べたビーフシチューをまねて舞鶴時代に作らせたのが、その「甘煮」ではないかと私たちは考えています。今から110年も前ですからワインもバターもなく、

工夫して作っては家族に食べさせて、結果を記録する繰り返し。試行錯誤を経て、ようやく「これはおいしい」と言っても

らえる肉じゃがができました。それからは何万食と作りました。

——呉市も「肉じゃがが発祥の地」に名乗りを上げていますね。

伊庭 ライバルはいてくださった方が励みになります(笑)。東郷さんは舞鶴に来る前に大佐として呉にいたから、向こうで先に肉じゃがを作らせたというわけです。そこで呉をリードしたいと思って考えついたのが「肉じゃがの里帰り」。メンバーが自費でポーツマスへ行つて市長と海軍の料理長を表敬訪問し、里帰りをしたという書面に署名をいただきました。すると呉との発祥の地論争がマスコミに取り上げられるようになった1年後に、横須賀市が「海軍カレー」を売り出し、さらに1年後、おくゆかしく黙つていた佐世保市に「そちらも何かせむ」と舞鶴から声をかけ、「ビーフシチューとハンバーガー発祥の地」と言っていたのだのです。旧軍港のあった4市が99年に舞鶴に集まり、海軍グルメで町おこしをする宣言を出しました。今年10月29日にも舞鶴市で「海軍グルメフェア」が開

かれます。

——関連食品の開発もされていますね。

伊庭 10年くらい活動を続けていると、市外から共同開発をしたいというお話をいただくようになりました。最初は月桂冠さんからの申し出で臨時総会を開き、「肉じゃがに合うお酒」を選定。次は四国のコロッケ専門メーカーにレシピを提示して、現在は肉じゃがコロッケが全国で売られています。肉じゃがパンや肉じゃが風ドーナツもメーカーと共同開発しました。経済効果があると市も注目するようにになり、いろいろと協力してくださいようになりました。

苦しい完璧主義を手放した時 地元へ目が向いた

——町おこしに対する伊庭さんの情熱が感じられますね。

伊庭 でも私はもともと舞鶴に関心がなく、都会にばかり目が向いていたんです。実家は舞鶴の金物店。店が忙しくて親にあまり構ってもらえなかったので、親は都会に出て仕事をして、日曜に休めるサラリーマンと結婚し、家庭と仕事を両立させたいと思っていました。ところが兄が店を継がないことになったため、私

が大学卒業と同時に実家の店に入社。1年後に見合い結婚しました。

伊庭 私は完璧主義者だったので難しかったです。店の仕事も妻としても母親としても、きちんと責任を果たしたいと思うと寝る間もなかった。店員の仕事も、生真面目に構えすぎたのかうまくいかない。イライラが募り、娘たちも私に近づくかなくなりました。店員失格、母親も失格。「私は何のために生きているんだらう」とまで思い詰めて、20歳代後半から体調を崩してしまいました。

——お辛かったですね。転機はいつ訪れたのですか。

伊庭 35歳の時です。さんざん悩んだ挙げ句、店員の代わりも妻の代わりもあるけれど娘たちの母親は私しかいない。それを大切にすれば、他のことはできなくてもいいじゃないか。できない自分を認めて割り切つて、どうせならもつと毎日を楽しく過ごしたい。そう思えた時にすごく楽になって体調も良くなりました。その時、この舞鶴のどこが嫌いなのだろうと考えて、これから一生を送ろうとしている地元を全然知らない自分に気づいてがく然としたんです。それから地元へ

目を向けるようになり、以前は断っていた地域婦人会やPTAの役員も引き受けるように。地元にお返しをしようという気持ちでした。

——ご自身が変わると、周囲に何か変化はありましたか。

伊庭 娘たちが生き生きしてきました。夫も笑顔になる。地域の方からも声をかけていただくようになりました。私が完璧を求めて店番をしていた頃は、真剣すぎて怖がられていたようですね（笑）。外へ出て人と関わることで、自分を客観的に見られるようになりました。人とのつながりって本当に大事だと思います。

地元の「おかみさん」が立ち上がる

——そして91年3月、「浅草おかみさん会」との出合いがありました。

伊庭 それはもう衝撃でした。41歳の時です。東舞鶴で「町に来る」と言えばこの八島商店街に来ることを指していたのに、駅の南に大型店舗が進出することになり、危機感を抱いていた頃です。当時商店街の役員といえば男性でしたが、世の中は女性の社会参加が進んできました。そこで役員が、浅草商店街を元気にしてい

る「浅草おかみさん会」の会長さんをお呼びして、八島商店街のおかみさん全員が料亭に集まりました。そこで聞いた言葉が衝撃的でした。「店の奥に陣取ってお客が来ない来ないと愚痴を言っているだけなのは『奥さん』。女性がもつと社会のことを勉強し、どうすれば商店街が活性化するかを考えて行動しなさい。自分の判断で人に命令できるくらいの見識をもつ『おかみさん』にならなさい。「男性は地位や肩書きを気にするし失敗を恐れるけど、あなたたちは失うものはないダメもとでやってみなさい！」と。私にとっては機が熟した時の出来事でした。

——そこからの行動が速かった。

伊庭 みんな興奮が覚めやらないまま翌日反省会をしました。すぐに「八島おかみさん会」を作ろうと話が決まり、翌4月に30名で発足。地元の新聞社が大きく取り上げてくれ、のちのち商工観光課にも大変お世話になりました。その時も肝に銘じていたのは浅草のおかみさんの言葉。行政や企業との連携は必要だが補助金をあててはいけなさと。商店街全体を仕切る商業協同組合とは関係なく立ち上げた任意団体ですから、組合からお金をもらうこともありません。まちおこ

しの先進地、神戸へ視察に行った時も身銭を切りました。2番目に若かった私が会長を引き受けたのは、うちは両親も元気で店員もいたし、地域のお役もさせていただいたことで自分自身が立ち直れたからです。ボランティアをさせていただくことで元気をもらいました。

——「おかみさん」の強みとは。

伊庭 肩書きのないのが強み。そして店にいつもいるから、お客さんの本音が聞ける。それをすぐに女性ならではの柔軟さをもつて、全員の知恵と行動力で経営に反映できる。みんな毎晩のように集まり、30人いれば、得られる情報が30倍になることも知りました。

——具体的な活動を教えてください。

伊庭 まず、安い会場を借りて消費者懇談会を開催しました。どの年代からも、商店街の街灯が早く消えてしまつて寂しいという意見が出た。今は夜10時頃まで点灯しています。6月〜7月の毎週土曜に開いていた夜の市で、空き店舗を無料で借りて麦茶サービスなどもしました。これもダメもとで不動産屋に掛け合つたら快諾してくださつた。お客さんや観光客の要望を取り入れてこの浜地区のタウンマップを作ると、今度は舞鶴市全体が

元気にならないと浜地区も元気にならないということ、舞鶴全体のマップを作った。地元の土産も自衛隊グッズをはじめ、今まで18アイテムを制作。舞鶴が舞台となったNHKドラマ「ええにょぼ」の宣伝では、観光協会や市と協力して大阪などへキャンペーンに行きました。

今まで家庭と店のことしかできないと思っていた私たちが、世の中に喜んでもらえることができた。するともつと喜んでもらいたくなつて、どんどんアイデアが出てくる。この日替わりシェフの店「八島いっぶく亭」も空き店舗を利用して、八島おかみさん会が運営しているものです。毎月29日には私がシェフになつて「元祖肉じゃが定食」を作ります。わざわざ市外から食べに来られるお客さんもいるんですよ。

同志社で学んだ多様な価値観が現在の連携活動に生きている

——おかみさん会の活動を通じて得た、最も大きなものは何ですか。

伊庭 一人ではできなくても、小さな力が連携すれば町を変えられることがわかったことです。94年には「まいつる女性連絡協議会準備会」から手紙をいただき

ました。舞鶴の女性の地位はそれほど変わっていない、もつといろんな方面と連携していきましようという主旨でした。八島おかみさん会も加入して、14団体でスタート。市に陳情して、99年に「舞鶴市女性センター」の設立が決定しました。

でも行政に運営を任せていては型どおりのことしかできないと思ひ、市民に運営を任せてほしいと言ひ続けた。最初は相手にされませんでした。舞鶴市女性センター条例に「運営を公共的な団体に委託することができる」という一文が入つた。じゃあ、この「公共的な団体」を作ろう。私を含む4人が全市に呼びかけて2001年にできたのが「舞鶴市女性センターネットワークの会」で、八島おかみさん会も参加しています。当初から私が代表を務め、2年後にNPO法人資格を取得。昨年女性センターが「男女共同参画センター」と名称を変えたのを機に、運営組織も「まいつるネットワークの会」に改称しました。育児支援や環境保全、コミュニティスペースづくりなど、幅広い活動を行っています。

——参加団体が増えてくると、意見の相違から来る衝突などはありませんか。

伊庭 その点について、私は同志社大学

で学べたことに心から感謝しています。非常に自由で、何かを押し付けるとか無理に型にはめることのない校風でした。勉強のできる人は服装が地味で真面目なタイプの人ばかりと思つていたら、同志社で出会つたのはおしゃやれで社交的で文学に深い理解があり、自分なりの考えを的確に表現できる人たち。大きなカルチャーショックでした。世の中にはいろんな人がいて、それぞれが尊重されることを学びました。そんな4年間を過ごせたから、私の中にもいろんな人や状況を自然体で受け入れられる素地が育まれたのだと思います。

——最後に読者へのメッセージを。特に仕事と家庭の両立を目指している女性にひとことお願いします。

伊庭 自分にできないことはできないと認める。できない部分は他の人に助けてもらえばいい。できないと認めるのは悔しいし勇気が必要ですが、負けを認めるのも立派なプライドです。そんなふうになを楽に持てた時、また新たなスタートを切れるのではないでしょう。

（聞き手：菅村まり、2011年6月16日、舞鶴市「八島いっぶく亭」にて）

桑原教修さん●児童養護施設 施設長

さまざまな問題を抱えた子どもたちを支援

人によって傷つけられたことは人によって癒されて回復されなくてはならない

「児童養護施設舞鶴学園」は、小舎制という画期的な養育システムを取り入れ、家庭などさまざまな問題を抱えた子どもたちを育てています。そこでの子どもたちの日常と職員の方々の献身的な取り組みを記録したドキュメンタリー番組「映像'08 家族の再生」ある児童養護施設の試み」は、大きな反響を呼びました。全国の施設関係者の研修、見学が絶えないという舞鶴学園を訪問し、施設長である桑原さんに小舎制の意義や半世紀近く児童養護に携わって来られた歩みについて伺いました。



くわはら のりひさ

1945年鹿児島県生まれ。1967年同志社大学神学部卒業。「児童養護施設舞鶴学園」児童指導員を経て89年より同施設長。2001年に舞鶴市泉源寺立田の現在地へ法人移転を実施。児童養護施設を大舎制から小舎制へ移行するとともに保育所「タンポポハウス」を設立。05年、児童家庭支援センター「中丹子ども家庭センター」設立。現在、全国児童養護施設協議会副会長、京都府児童福祉施設連絡協議会会長、小舎制養育研究会理事などを務める。

舞鶴学園 <http://www.maizurugakuen.org/>

育ちの過程を修復し、自立するための力を蓄える

小舎制とは、そもそもどういうシステムなのでしょう。

桑原 小舎制とは一般の家のような建物で少人数の子どもたちと職員が家族のように生活をするというシステムです。大舎制が20人以上を一つのケア単位の基準としているのに対して、小舎制では12名までがケア単位で個別ケアに近い。いま六軒の家があつて、それぞれの家に6名

から9名の子どもと職員がともに生活しています。各家に予算を渡し、職員と子どもたちが一緒に水光熱費から食費まで自分たちでやりくりしているんですよ。夕食は栄養士が立てた献立に従ってパートの人が半調理をし、職員が手を加えるというやり方ですが、朝食は献立から自分たちで作る。水光熱費の使い過ぎも分かるし、そういうことを自ら経験しながら生活するということをやっています。

桑原 なぜ小舎制を採用されたのですか。

には、いろんな手当てが必要です。その基本になるのは暮らし。暮らしのなかには知恵や英知がいっぱい詰まっている。だから暮らしをしっかりと積み上げて行く、何気ない穏やかな日々の生活をこの子たちに体験させることだと。それと、大舎制のなかで長く暮らししている子どもは集団のなかで要領よく立ち回れることはできても、一歩二歩踏み込んだところで人の関係性を作る力が備わらない。少人数の生活空間では、互いに踏み込まないと暮らしていけないし、踏み込まれても受け入れないと暮らしそのものが成り立たない。相手の子どもにも起こる家庭や学校の問題を引き受けて行かないと、自分も受け入れてもらえない。残酷だけれど、そういう経験をしないと自分が結婚して家族を持った時に窮屈に感じたりするだろうし。それで、小舎制にしたのです。

——「育ち直し」をするための場場ということですね。

桑原 以前、施設では生活のなかに演劇を取り込んでいました。家庭劇を通していろんなことを学んでほしいという意図で。ところが、お父さん役、お母さん役を与えても子どもたちはできないと泣き出してしまふ。台詞のなかに親の愛を伝えるメッセージが含まれている、その台詞を何で感情を込めて言えないのかと迫

つても、子どもたちは「言えない」と。家庭生活を経験していないから親がどういふものか分からないんです。両親は朝起きるといなくなっていた。家族を教えるてくれるのは先生しかいないじゃないか。「家族の勉強を教えてください」と作文で訴えてきた子どもいました。

——一人ひとりが厳しい背景を背負っているのですか。

桑原 ええ、お母さんに精神障害があつて、産まれてすぐに乳児院に預けられ、そこから養護施設に来て、18歳までずっと施設で育った子どもがいました。規定で自立しなければならぬ。とはいえ、いきなり自炊しろと言われてもできるわけではない。当時は厨房で作られた食事が出てきてそれを食べるという生活でしたから、食材の買い物もしたことがないし、材料すら知らないわけです。その子は保育士が食事を作る姿を見て、普通の人はこういうのを見ながら生活しているんだなあ、でも私は親がご飯を作っているところを見たこともないし、自分で作ったこともない。このままで大きくなるのは不安だ、自分が結婚して子どもができたとき何にもできないでは困ると訴えてきたんです。それで一人暮らしを始める前に部屋や台所、トイレまで特別に作って

いですか。衣食住の家庭生活のなかでいろんなことを学びながら自立の力を蓄える。そういう育ちの過程を保證されていない子どもたちは、そこから修復にかかわなければならぬ。それは特別なメニューを作つてというのではなく、「育ち直し」をするしかないんです。そうでなくとも、いまネグレクトで放つておかれた子どもなどが来ていますが、何にも身に付いていない。自分を律することもできないし自己肯定感も低い。そういう子どもたちが自信を持って歩んで行くため

自立のための練習をさせたのですが、結局力をつけてやることはできませんでした。

それでもその後、その子は頑張つて自立しました。やがて結婚して子どもが「だや」と言うわけ。そしたら、その子が「だや」と言うわけ。ああ、そういう経験を何にもしてないんだ。普通の家庭に育てば親や親戚が子どもをあやしている姿を見るだろうし、見よう見まねで学んでいくんだらうけれど、そんな経験をこの子たちはしていない。経験していないことはできないよなど。僕はそれまで施設で「家族を教える」ということは考えていなかったんですが、そういう経験をさせて、「家族の勉強」が必要だと強烈に感じたんですよ。

——子どもたちの暮らしぶりはドキュメンタリー番組にも取り上げられました。

桑原 現在、施設に入ってくる子どももの99・9%は虐待を受けていた子ども。そういういろんな課題を持つてここにやってきた子どもたちを守っているのは若い

職員です。子どもたちを何とかしたいと志をもってやってくる若い人たちです。とはいえ、そういう子たちと向かい合うというのはケースによっては凄まじい。身体に虐待を受けた子どもは、自分が受けた行為をそのまま職員に仕返すので職員も吹っ飛ぶこともある。でも、それを通らないと自分が取り戻せないから本人も苦しみながらやるんです。子どもたちは一番身近な大人である親を信頼できない。子ども時代を経験し直しながらそこを修復する過程ですから、それは大人が引き受けて受け止めてやらなくてはならない。人によって傷つけられたことは人によって癒されて回復されなくてはいけない。そのことを社会は知るべきだと考えたんです。

施設は「家庭のモデル」になり得る

——保育園や児童家庭支援センターも併設されていますね。

桑原 地域の子育ての拠点を作りたいという思いから、「認可保育園タンポポハウス」「中丹こども家庭センター」を開設しました。舞鶴は海上自衛隊で働いている人が多く、彼らは当直勤務があるし、いったん船に乗るとしばらく帰って来れない。もともと24時間態勢の施設という利点を生かしてそうした当直やあるい

は病気、出産などで親が世話をできない時に子どもたちを預かるショートステイを始めたわけです。それは地域の支援になるし、一方で児童養護施設と地域との垣根を取り払うことにもなります。

——差別意識を取り払う役目も果たしているということですね。

桑原 社会は、施設の子どもたちを特殊な子どもたちだとかような表現をして一般の子どもたち以下に置こうとする。「学園の子」というだけで石を投げられて泣きながら帰ってきた子どももいます。それがたまたま辛く辛い。学園がここに転ずるときにも強烈な反対運動が起こりました。それは、正しい情報が伝わっていなくて不安をかき立てられたからなんです。在宅支援をすることで多くの人が学園の日常に触れることになる。それで次第に、施設に暮らしている子どもたちに対する理解が深まりました。学園に対しても変わっていききました。いまは家庭がもろくなつてきていて、施設で生活している子どもたちの背景とほとんど変わらない。養護施設にくる子どもは家庭が特殊なのではありません。そういう意味で、逆に施設が家庭のモデルになれるのではないかと。僕は大陸から引き揚げてきた人間なのですが、そういう戦争体験も伝えていきたいし、そうしたことも含めて施設だ

大勢のタイガーマスクに支えられて

——舞鶴学園は今もボランティア学生を受け入れているのですか。

桑原 僕は同志社のEVE祭の期間にここでボランティアをして、初めて養護施設というのを知り、その現実に触れたんです。そのとき一人では何もできないということが分かり、1年次生の終わり頃に教会の学生青年会や友人たちと「養護施設研究グループまいづる」というサークルを作ったんです。当初は京大、大阪工大、府立大、池坊、同志社などの学生が中心で、一時期は同志社女子大なども参加していましたね。そのサークルがいまも「舞鶴グループ」という名前が続いているんです。華頂短大に本部があつて、大谷や花園大学などの学生が参加しています。自分が学生時代そうであったように、まずは経験することが大切です。そこから、できるだけ多くのボランティア学生を育てたいという思いで受け入れています。

桑原 これからの課題をお聞かせください。子どもたちは高校を卒業するところを出て行くわけですが、親と関係が切れている限り、自立できるまで施設が面倒を見ることになります。指導員だった頃、ある子どもに大学に行かせてくれと

からこそできることも多い。地域の家庭のモデルになるような豊かな日常を組み立てていく、それが目標ですね。

子どもたちとの出会いによって、いまここで自分は生かされている

——この仕事に就かれたきっかけをお聞かせください。

桑原 僕が同志社大学に入ったのは東京オリンピックの前年、ちょうど日本のエネルギーが石炭から石油に変わる転換期で、炭坑の閉山が相次ぎ、炭坑町と呼ばれていたところでは地域破壊が起こって子どもや老人、女性など弱い立場の人々が追い込まれていました。当時、同志社にはそうした問題に対して強い関心を持つ熱い先輩たちがいて、大学を休学して地域に入り込み、ガリ版新聞を作ったりしていたんです。そんな先輩たちに動かされたこともあり、僕自身が九州出身だったこともあつてとくに筑豊の状況は放っておけない、地域おこしをやるうとキヤラバン隊を組んで街灯もない筑豊の町を回るようになりました。グリークラブにチャリティーコンサートを開いてもらって資金を集め、クリスマス会を開いて劇をしたり学校を訪ねたりしていたのですが、そうした地域交流のなかで、生活保護を受けている家庭も多く、貧困が子

どもの環境や意識にも強い影響を与えていることを知ったんです。現実を見せつけられた思いでした。それで厳しい状況にある子どもをもっと知らなければと、児童養護施設でのボランティアを希望して施設を回ったのですが、京都市内の施設はすべて断られ、最終的に受け入れてくれたのが舞鶴学園だったんです。——それが学園との出会いですね。

桑原 ちょうど学園闘争の時代で殆ど授業がなかったこともあり、学生時代はずっとここに通っていました。あるとき、子どもたちに「どうせ桑原さんは卒業したら他所にいつてしまうんでしょ」と詰りめ寄せられたんです。実際、ミッション系の仕事をしたいという気持ちもあつて悩んでいたのですが、子どもたちと深く関わっていくにつれてここを離れるわけにはいかない、現場に入るべきだと思うようになりまし。ずっと後のことですが、学園に匿名の寄付があつて、調べると贈り主は当時私に詰め寄った子ども一人だったんです。御主人が亡くなり、その遺族年金を送ってくれていたんです。それで久しぶりに会って、ああ当時の子どもたちのエネルギーに引張られて僕はここにきたんだ、彼らとの出会いがあつて自分がいまここで生かされているんだなあとしみじみ思いましたね。

言われたのですが、資金も何もありませんでしたから無理だと言わざるを得なかった。その子に申し訳ないというのがあつて、自分が施設長になつてから基金を作り、希望者には進学の夢を叶えてやるような態勢を整えました。「大人は信じるに足る存在だ」と言い続けているのに、大学に行つて勉強したいと言う子に、「ダメだよ、お金ないのに」とは言えないじゃないですか。施設の子どもたちには大学に進学するための支援制度がまったくない。子どもたちの置かれている状況を行政も市民ももっと理解して、そういう制度を作ってもらいたいと思います。昨年末、タイガーマスク現象というのが起きて、マスクなどでも盛んに取り上げられました。しかし、そんな一過性のものでは意味がないんです。有り難いことに舞鶴学園には日常的に応援してくださる「タイガーマスク」がたくさんおられる。今年で16年目を迎えた韓国の施設との交流もそういう方々の支援があつて始まったものなんですよ。支えてくださる方々の思いを大切に、さらに充実したものにしていきたいと思つています。

（聞き手・井上陽子、2011年5月31日、舞鶴市「児童養護施設舞鶴学園」にて）